

希学園 第396回 小5公開テスト 解説動画

下記、URLよりご視聴いただけます。

動画タイトル	URL
第396回公開テスト 小5国語 解説動画(2025年5月11日実施)	https://vimeo.com/1082806116/acc94bb54f

1

ものろう

(1 完答)

ウ

3

(記述題)

ほら学者

(4 完答)

イ

6

黄信号

イ根葉

8 A

(8 A 完答)

空

C

イ

区別

b

待って

c

成功

自体

e

結果

f

注意

2

口

b

ペ

c

ト

2

約束

(2 完答)

いた

C

4

(記述題)

5

重たきた

(5 完答)

はるかが差

7

ア

堪忍袋のひも

9

イ

予測ない

(10 完答)

絶交

12

白猫けて

(12 完答)

1

哲学という車にのりか

(同意可)

でしょうか。

2

よつばのクローバーで
作ったしおりを絶対に
なくさない

という約束。

(同意可)

配点	
1 8・9 2 1	各2点×12=24点
1 3 2 4	各6点×2=12点
その他	各4点×16=64点
100点	

① (吉田夏彦『なぜと問うのはなぜだろう』より)

1 すぐあとの文で、「哲学も科学も、人間の好奇心をみたすために、発展させられてきた」と説明されているが、これでは条件に合わない。本文最後のほうに「ものごとを知ろうという点では科学とおなじことです」とある。「という点」という言葉にも注目したい。

2 1はエ、2はイ、3はアになる。アは前の文を言いかえたり、まとめたりするときに使う。イは前後が反対であったり、対比したりするときに使う。ウは同じようなもの、仲間になるものを並べるときに使う。エは例を挙げるときに使う。

3 前の段落では「科学という車にのって進むと赤信号にぶつかる」という内容が書かれていた。直後の「かならずしも、そうとばかりはいいきれません」は「哲学で答えが出るとはかぎらない」という意味である。あとのほうに、「さきほどの例でいうと、赤信号を青信号にする□薬が哲学なのではありません」とあることにも注意する。

4 こういう人の「答え」は「空想的」なものであった。つまり「ほら」だったのである。「ほらふき学者」という言葉の前の「科学が、哲学からわかるまえ」も、——線③の前の「ガリレオやニュートンの時代になるまえ」と同じ内容になる。

5 アは「科学」が答えてくれるもの、ウとエは「また」で並べられており、——線④のあとの「人間が…あるのか」と同じ内容になる。イは「赤信号」がたつことになる問いだった。

6 「まえにすすむ」は青信号、「とまる」は赤信号、では「注意しろ」は何か、と考える。

7 この段落のはじめに「そこで」とあり、これは前の段落の「哲学は…」という内容の続きである。前の段落では、「哲学は、おちついてまわりのことも考えるということと結びつく」という内容が書かれていた。

8 Aは「しつこく、こまごまと」という意味になる。「葉ほり」は意味の上からはおかしいのだが、「根ほり」に語調を合わせたものである。Bは車輪などがむだに回転することだが、ここでは「発展とはならず、同じ状態をくり返す」という意味になる。Cは「よく効く薬」という意味で、「非常に有効な解決策」という意味で使うことが多い。

9 a「区」の部首は「匚」なので、左下をつづけて書くこと。b「待」は部首がぎょうにんべんである。c「功」の右を「刀」にしない。dは同音異義語が多いので気をつけよう。eはいとへんを六画、「果」を八画で書くこと。f「意」は「音+心」なので「竟」のよきな書き方をしてはいけない。

② (まはら三桃「よつばが消えたら」『くらぐらのブックカフェ』所収)より)

1 aは、足りないところ、やりそこなったところをあとから補うこと。bは、進め方の速度。cは、昔をなつかしむことだが、「昔風」という意味でも使う。

2 「信じられない」ようなことをしたから、「このみちゃんとは絶交!」と言って教室を飛び出したのである。その原因は「このみが約束を忘れていた」ことだと書かれていた。

3 ——線②の言葉がふたたび出るところまでが過去の部分であり、——線①の「信じられない」という思いが実際の言葉になったのが★のあとの「信じらんないっ!」である。

4 あとのほうに「あんなに約束したのに」とあることに注目すれば、もう一つの「約束」が「しおり」に関するものであることがわかるはずである。ポイントになるのは「絶対なくしちゃだめだよ」ということなので、これを中心にとめる。

5 前の文の「重たい:提げて登校してきた」をまとめて言いかえている部分を、これよりあとの文中からさがす。

6 直後の文ではないことに注意する。そのあとを読んでいくと、「驚いたのはそこじゃない。…ことだった」と書かれている。

7 「眉をひそめる」は、心配なことや不快なものとで表情をゆがめることである。このみも、よつばのしおりをなくしてしまったのはさすがにまずいと思って、必死になってさがしているのだろう。

8 アのあとで、「さっき聞いたのは、不満を入れた袋のひもがブチ切れた音だと思った」とある、この「袋」は、次の文で「堪忍袋」というものだと言われていた。ただし、慣用表現としては、「ひも」ではなく、「堪忍袋の緒が切れる」という形で使う。

9 「場面」が変わるところである。場面を変える要素は、①時間、②場所、③登場人物、になる。③については、人物の出入りや心情の変化などで変わるが、ここでは「白猫」の登場が当てはまる。

10 「ことをするような」という言葉が大きなヒントになる。具体的な行動が書かれているのは「違う曜日の…」の段落だが、これはその前の「このみの行動はまったく予測不能で突拍子がない」ということの例である。

11 「このみちゃんとは絶交!」と言って飛び出してきたことをおさえる。このみがかするたびに後始末をしてきたのは「がまんしていたのだ」と気づき、「もうこのみとは付き合えない」と思ったのである。

12 ☆の前に「自分を呼んでいるみたいだった」とあった。それにつられて追いかけたのである。☆のあとでは「見覚えのない町並み」に来ていることを「白猫を追いかけているうちに、どうやら迷ってしまったらしい」と説明している。